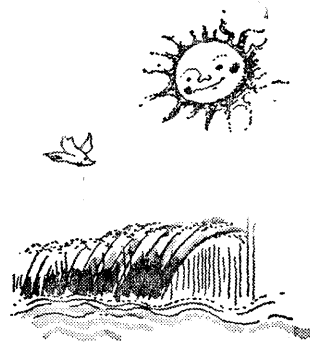


# メイド・イン・神さまの 子どもたち

山下史路



ある。欠点だらけの人間が人間を育てるのだから恐いものだ。その上現代は、従来の常識がくつがえされるようなことが、学校や幼稚園で起きている。「エーウッソー」と叫びたくなるような事柄に今までわたくしも出会った。それを書いてみる。

我家には小学校六年生の息子が一人いる。ということ  
は、わたくしは子育て十二年のキャリアアママということ  
になる。一つのことを十年も学んでくれば、大体どこの  
世界でも一人前になるけれど、いまだに子育ては難し  
い。子供が小さい頃は肉体労働であったが、成長するに  
つれ、精神労働に変化してきているから、なおのことで

その一。幼稚園に入る年齢になって、近  
所の幼稚園を見学に行った時のこと。まず園  
庭にあるカラフルな遊具が目飛び込んでき  
た。遊園地に迷いこんだのではないかと錯覚  
しそうであった。幼稚園の先生方は、「遊びを  
通して創造力を伸ばしましょう」とカッコよ  
くおっしゃるが、できあがった遊具で創造力が伸びるだ  
ろうか。また幼稚園と遊園地にある遊具が同じならその  
違いはどこに……。どのチャンネルを廻しても、ダイア  
ナファッションや聖子ちゃんの結婚式しか流していない  
テレビ界の貧困な発想と同じように、これではワンパタ  
ーンの思考回路の人間しか育たないのではないか。

その二。我家の息子は小さい時から絵が好きで、毎日動物や乗り物を熱心に書いていた。保育園に入ってから、園から帰るとせっせと書いていた。ある日その絵を先生に見ていただきたくて、子供は得意げに持って行った。それを見た先生は、「この象は○○ちゃんの影響で、この魚は○○ちゃんの影響で、この亀は保育園でかっているからです」とまるで子供の頭の中全部が見えているかのようにしゃべった。子供はがっかりした。これではまるで息子は人の影響だけで生きているカラッポ頭の人形ではないか。以前から象も魚も書いていたし、亀は家でもかっていたのに。子供のやわらかな心は、ガリガリ頭の先生にズタズタにされたような気がした。

その三。小学校に入学して「学校のきまり」に驚いた。まず「集団登校をし、きまった通学路以外歩かないこと」というのがある。わたくしの子供の頃とは交通事情も違い、安全対策ということなのだろうが、一歩外に出た時点から、もう学校の管理下にあることだ。通学途中のみち草がどんなに解放的で楽しかったことか、など

というのは感傷的だと一笑に伏されてしまふ雰囲気だ。

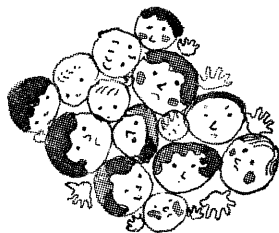
また「校庭で遊び時間に野球やソフトボール、サッカーをしない」というのがある。これも生徒たちにケガをさせまいという学校側の配慮なのだろうが、いったい子供たちは何をして遊べはいいのだろうか。また「一年生は自転車に乗ってはいけない。二年生は保護者の目の届く範囲で乗ること」というのがある。前の二点は事故を起こした時親たちが、学校側の管理不行届として突き上げてくることを恐れての先手行為と考えられるが、後の一点については、どう考えても学校側の越権行為としか思えない。この六年間いまだに「学校のきまり」は変更されていないのか、学校に言っても変らないとあきらめているのか、定かではないが……。「子供を過保護に育てないようにしなせう」と先生がたはよくおっしゃるが、子供や各家庭が判断すべき内容にまで言及し、「きまり」ということで押しつけてくるのは、子供はもろんのこと、子育てをすることで一緒に成長するであろう親までを

も、潰していることにほかならない。父母も知らず知らず親の責任を放棄させられていることになる。

その四。幼稚園や小学校の学芸会で主役がゾロゾロ出てくることに驚いた。皆平等に体験させたいという園や学校側の配慮なのだろうが、なんとも気持ちが悪い。人間は法の下では平等だが、能力や才能のあるジャンルは、人それぞれ違う。ある子は運動が得意であるが音楽が苦手であるとか、音楽は得意であるが勉強は苦手であるとか、勉強は良くできるが運動は下手であるというように。それがありのままの姿ではなからうか。他者との違いを知るためにも、個性を伸すためにも、真の平等意識を育てるためにも、お互いの長所短所を認識するところから出発しなければいけないのではないか。苦手なことまで皆と同じように自分もできているのだと思わせられて育つ方が、より残酷なのではないか。平等を乱用することで、何が見えるだろうか。それは幻想にすぎないのではないか。学芸会や運動会でたとえコンプレックスを抱いても、悪い結果になるとは思えない。劣等感を

抱くことが、他人の痛みを理解できる人間になり、悩むことで考える大人に成長するのではないか。ただ明るいだけの人間なんて気味が悪い。今ネクラ人間が嫌われているのは、誤った平等意識の乱用の結果ではなからうか。

その五。学校の音楽会で子供たちが唱う歌に、テレビ



マンガのテーマソングがよく出てくる。また学校から渡される遠足等の歌集に流行歌、歌謡曲のたぐいも「生徒の希望」とかで載っている。音楽会のために数ヶ月練習する曲が、美しくもないテレビソングとは情けない。それならば別に学校の音楽の時間などなくても、家でテレビを見ていればいいではないかということになる。街に氾濫している流行歌は、放っておいても耳に入ってくる。だからこそ学校の音楽の時間は、芸術の香り溢れる美しい音楽に触れさせる場であって欲しい。また「選曲は子供に任せた」と先生がたは責任回避なさるが、選ばれた曲が適当でないと思われれば、そこで先生がたの見識や指導力を発揮していただきたい。そういう時こそ、「先生」は必要なのではないだろうか。昔から言われていることだが、骨董品店の丁稚は、主人から本物だけを見せ続けられてゆくうちに、偽物が判別できるようになるとか。それと同じで、子供たちに、本当に美しいもの、善いもの、真なるものを教え続けることが教育なのではないか。

その六。サトウサンペイ氏の朝日新聞四コマ漫画にこんなものがあつた。学校の個人面談の場面で、先生と母親がむかいあつて座っている。母親が先生にむかつて、「しつつけをしっかりとってください」とお願いし、先生は母親に、「勉強をさせてください」と言っている。この漫画のように学校と家庭の役割が逆転しているという笑うに笑えない事実がある。今はこの漫画以上に事態は進行し、「勉強は塾に行つてしてください」という感さえする。というのはこの春、我家の息子が塾の春期講習に行つた。親の方は塾を毛嫌いしていたのだが、見直すようなハメになつた。塾から科目別クラスの平均点と本人の平均点が各先生のコメント付きで郵送されてきたからだ。考えてみれば、息子が行っている小学校では、この六年間に一度も平均点が出されたことはなかった。わたくしが小学生だった頃、毎回クラスの平均点と自分の点数が答案用紙に書かれていたものだ。当時は一学級五十数名いたので、現在（四十名以下）より大変であつたらうと思われる。子供が学校から持つて帰る答案用紙と成

績表が、どうもピツタリこず、クラスの中で、学年の中で、勉強においてはどのような位置にあるのかつかめなかったのは、この平均点が解らないことであつたと気がついた。

今まで体験した中で、印象的なことを取りあげてみたが、こういうことはどの学校でもあるようだ。否むしる定着化しているといつた方がいいかもしれない。周囲の親たちは「いちいち驚いていたら身が持たないわよ」などという。あきらめムードでやり過してしまっているようだ。このような形で、どんどん親の感性も鈍らされてゆくことは、恐い。当然その影響は子供に現われるのだから。

また先生方も、「近頃の親はうるさいから」と、事なかれ主義におちいることなく、先生としての誇りを持ち、高い理想にむかつて教育をしていただきたいものだ。

現在の教育現場の荒廃は、大人一人ひとりの中に、夢や理想が消えてしまったことにあるのではないか。昔わた

くしたちは、先生や親から、理想を聞かされて育つた。その理想が、現実の世の中を知った時、悩む源になつた。理想と現実が自分の中で葛藤することで、大人になるのではないか。今はそのハードルさえない。現実主義者ばかりだ。現実主義者を世間では大人というけれど、わたくしはそれは誤りだと思う。理想を持ち、現実を把握できる人のことを一人前と考へたい。第一夢や理想のない人は魅力に乏しいのではないか。現代は夢や理想を持ちにくい世の中だということは、重々承知の上だけど……。

子供時代の教育が大切だとはよくいわれることである。だからこそ、幼稚園は幼稚園らしく、学校は学校らしく、先生は先生らしく、親は親らしく、その役割を果すことで、メイド・イン神様の子供たちは子供らしく育つのではないだろうか。

(練馬市民大学代表)